

笑う「ハーフ」の身体

——「日中ハーフあるある」動画を事例に

大阪市立大学都市文化研究センター研究員
ケイン樹里安

1. 問題設定・先行研究

父母のどちらか一方が外国人である者が「ハーフ」と呼ばれるようになって久しい。近年、「ハーフ」を対象とする表象分析やインタビュー、参与観察による社会学的研究の蓄積がみられるが、依然としてその数は少ない（岩淵 2014）。ところで、「ハーフあるある」と呼ばれる話法がある。「ハーフ」だからこそ直面する問題状況や経験を、面白おかしい「ネタ」としてパッケージ化した上で、笑える話として繰り出す話法である。この話法は、M.セルトーならば「技芸」、E.ゴフマンであれば「技法」と呼ぶであろう、生きづらい日常をやり過ごし、切り抜けるための話法であるとされる（ケイン 2017）。主たる先行研究では「日本人」とはみなされにくい身体的形質が顕現している「ハーフ」による話法が取り上げられてきた。だが、現在、「日本人」とみなされやすい身体的形質および、そのルーツを持つことを「資源」として活用する形式の「ハーフあるある」が動画共有サイト上で発信されている。それらの動画は、主に日本語圏のオーディエンスを対象として制作された市井の人々によるメディア作品である。本報告は、それらの動画のなかでもまなざしを向けられる対象として織り上げられた「笑い」に刻み込まれた社会学的な力学を考察することが本報告の目的である。

2. 方法

日本と中国にルーツをもつ「日中ハーフ」の人々が日本語圏視聴者に向けて公開した「日中ハーフあるある」という動画、それに付随するコメント、そして、制作者のソーシャルメディア上の投稿を対象とし、批判的談話分析（Critical Discourse Analysis）を行った。加えて、制作・公開に関わる当事者へのインタビュー調査を行った。

3. 結果・結論

動画共有サイトで披露された「日中ハーフ」の人々による話法は、現在、メディア横断的に活躍する「ハーフタレント」的な身振りであると同時に、戦後日本社会においてテレビを介して人口に膾炙した「素人」的な身振りであるともいえる（太田 2018）。日本語圏のオーディエンスに向けて、中国で制作された映像作品において登場する「ハーフあるある」という「笑い」の話法は、バフチンの秩序転覆をもたらす笑い、あるいは、ベルクソンの逸脱者の矯正をもたらす笑いともいえるが、自らの身体的形質およびルーツを再帰的にモニタリングするなかで、徹底して「見せる／魅せる」ために複雑に編成された、独特な形態のものであった。このような「笑い」が越境的なメディア作品としてもたらす影響は、一層多義性を含んだものとなる。

参考文献

- 岩淵功一編, 2014, 『ハーフとは誰か——人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社。
ケイン樹里安, 2017, 『「ハーフ」の技芸と社会的身体——SNS を介した『出会い』の場を事例に』『年報カルチュラル・スタディーズ』5:163-84。
太田省一, 2018, 『「素人」の笑いとは何か——戦後日本社会とテレビが交わる場所』佐藤俊樹編『社会が現れるとき』東京大学出版会, 165-95。